

蓮如さんの歯形

— ヨシの葉に見られる一列に穴が並んだもの 琵琶湖地方での呼び方 —

1. ヒカゲチョウの幼虫

チマキザサより葉の幅の狭いネザサの葉身が欠けて主脈だけ残っているものがあちらこちらに見られます。ササの葉を食べる動物には、シカやウサギ、昆虫が考えられます。この中でこのような食痕は、蛇の目模様をもつジャノメチョウ亜科のタケやススキなど単子葉植物を食べるチョウの特徴です。この食痕はササの葉が開いてから食べていることを意味しています。多くの昆虫は柔らかい葉を好みますが、そうではないものもいるのです。栄養的には成熟した葉の方が優れているでしょう。



1 齢幼虫の食痕



ヒカゲチョウ幼虫

打吹山でこのような食痕を残すのは、ヒカゲチョウとクロヒカゲの幼虫です。成虫は春と秋の2回出現します。ヒカゲチョウは陽だまりに止まっていて、驚くと茂みに隠れます。似たクロヒカゲは日陰を好み、樹下を生息場所としています。ササの葉の食痕は秋の方が個体数が多くなることから、積雪前に目立ちます。4齢幼虫で越冬しますので、食痕のある葉の裏側を丁寧に見ていけば、幼虫を見つけることも可能です。付いている位置と体の模様、葉脈との関係に気付けば、立派な観察者です。

幼虫は特徴のある形態です。1齢では黒い頭部が目立つ姿をしています。脱皮後の2齢以上は、頭部に2本のつの状の突起があり、腹端も二つに分かれています。頭部を正面から見ると猫の顔に見えます。



ヒカゲチョウ



クロヒカゲ

2. ササの葉

2枚の写真の不思議な穴あき状態はどうやって生じたのでしょうか。このような状態が見られる植物の葉を探してみてください。共通点は何でしょうか。

ササの葉、ヒルガオの花、共通点は巻いている時期があることです。この時に一部をかじり取られると、そこが穴になるというしくみです。右の写真のチマキザサの葉は、同じ桿の連続した2枚です。左側が葉の先端です。2枚ともに巻いている時期に同時にかじられた痕です。写真の上下どちらの葉が早く開いた葉なのか、穴の位置から判断できます。ヒントは、この穴は当時同じ位置にあったということです。巻いた葉が外から見えない時期に食べたのはガの幼虫です。



ヒルガオの花の食痕も、花弁が大きく伸びてきた開花前に食べられたことがわかります。ヒルガオには毒があるのですが、エビガラスズメとかヒルガオトリバという毒をもとしないガの幼虫がいるのです。



チマキザサ

2枚の葉の穴列